

……作るわよ、マンダで

缶ジュース

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大蛇丸様とカブトとサスケくんが蛇料理を作る話。

……作るわよ、マングダで

目次

……作るわよ、マンダで

「オイラこそが究極の芸術だア！ 喝!!」

それを遺言に、半径十キロメートルのクレーターを作る途轍もない大爆発を引き起こし、暁のデイダラは死んだ。サスケくんの血も涙もない機転によって僕らは助かったけど、時空間転移のため生贄にされた口寄せ契約の大蛇、マンダは黒焦げの死骸を晒す憂き目にあつた。

大蛇丸様は焼け焦げたマンダの死骸を思案気に見上げていた。長年連れ添ったとはいえ、口寄せの蛇一匹の死に心を動かされるようなお方ではない。僕の人物評を裏付けるように、大蛇丸様は藪から棒に眩いた。

「……作るわよ、マンダで。満漢全席を」

困惑を隠しきれなかった、表情にしてしまった僕と、困惑に嫌悪感も混ぜた上で露骨に示すサスケくんを、順繰りに大蛇丸様は流し見た。

「デイダラは狩り終えた。俺は修行に戻る」

返答に迷う僕をよそに、にべもなくサスケくんは吐き捨てた。

「修行、修行ねエ……」

言葉尻の含みを感じ取り、サスケくんは剣呑な雰囲気纏う。

「何が言いたい?」

「目的に至る因果は直線的とは限らないのよ。その深遠な連鎖がわからないというのなら、あなたもまだまだだねサスケくん」

「わからないな。マンダで蛇料理を、それも俺がアンタと一緒に作って作る必要がどこにある」

わからないな、をことさら強調し、挑戦的にサスケくんが言った。

大蛇丸様は口角を上げた。

「イタチくんは」

反応は劇的だった。僕は思わず一步後ずさった。顔色を豹変させたサスケくんの、眼差しに宿る本気の殺意。先程まで殺し合っていたデイダラの最期、「儂く散りゆく一瞬こそが、美。つまり、芸術とは爆

発だア!! テメエらもアートを感じる! うん!」と、独自の芸術論を展開しながら自分自身を爆発のエネルギーへと転換し自爆する、常軌を逸したその瞬間よりも、さらに危険なプレッシャーを感じる。

「イタチくんは作ってたわよ、万華鏡写輪眼で

——完璧な、目玉焼きを」

サスケくんの殺気をこゆるぎもせず真正面から受け止める大蛇丸様の、蛇のような瞳孔が、サスケくんを射抜いた。

「彼、上手よね、料理」

「……………だからなんだ?」

「ちっぽけなものに執着すれば、本当に大切なモノを見失うものなのよ……、本当の変化は、規制や制約、予感や想像の枠に収まっていては出来ないのだから……」

依然として口角を上げたままの大蛇丸様が放った深遠なお言葉に、いつもクールを装ってるサスケくんには珍しくあからさまな動揺を見せた。目は見開かれ、視線は空中を小刻みに彷徨っている。そして、何かを突然理解したかのように、呆然と呟いた。

「つまり……そういうことか」

フフフと大蛇丸様は声に出して笑った。酷く満足げなご様子だった。

「あなたにもわかるでしょう、カブト」

欲望に満ち満ちた眼差しを向けられてしまい、僕は窮した。

さっぱりわからなかった。

一体大蛇丸様とサスケくんは何を理解しあったんだ……?

いくら大蛇丸様の腹心である僕でも、交わされた内容が当事者同士にしかわからないようなものじゃ察しようはない。マンダで料理を作る発想が(この段階で僕の理解を超えている)、どう転べば一族皆殺しを犯したS級犯罪者うちはイタチが目玉焼きを作っていたことに繋がり、「本当の変化」なんて観念的な話に辿り着く?

僕が僕である以上、例え正直な胸の内が困惑の一角でしかなくても、取り繕った真顔を貫き大蛇丸様のご期待に沿う他に術はない。僕の脳細胞は大蛇丸様の深謀遠慮を読み解くべく、活性化し白熱した。

「目的に至る因果は直線的とは限らない」これは恐らく、サスケくんに対する言葉であると同時に、大蛇丸様自身の目的達成のためのお言葉だ。大蛇丸様の悲願は、全ての術を知り尽くし、忍という存在の真理を究明すること。

その実現の一步として、大蛇丸様は自ら考案された転生忍術により本当のお姿を巨大な白蛇へと変えている。

ここで、マンダを食材に蛇料理を作り食するという不可解な発想に立ち帰ってみると、大蛇丸様の視点では、蛇であるマンダを食する行為は、共食いだということがわかる。

そして、かつて大蛇丸様が僕に授けてくれた言葉——「今までものが納得できないなら、代わりのものを見つけて次々に足していけばいいだけのこと。少しずつ集めた多くのものから実験と検証を繰り返し、知識と能力を己に蓄積させていく。そしてそこから新しい完璧な自分に向かって、生まれ変わっていく」

そう、ないものは付け足せばいい。全てを集めれば完璧になる。付加する度に近づいていくんだ。究極の、真実の自己へ。本当の自分へ。

もしそれが、「規制や制約、予感や想像の枠に収まっているは出来ない」「本当の変化」なら。

他の生命の経口摂取、最も原始的な同化行為、それが食事。大蛇丸様は、今から同種の生命を食べる……、共食い、カニバリズム、禁忌、いやむしろ……。勢いづいた思考回路にいくつもの単語と概念が浮かんでは消えていく。血霧の里の殺し合い、蟲毒。

違う。鍵は蛇だ……。龍地洞の白蛇仙人、同化、補完、自然との一体化、死と再生、うちはと千手、チャクラ——六道仙人。

冴え渡る思考がひとつのターニングポイントを突破したことを、その内容が言葉として纏まるよりも先に直感した。かつて大蛇丸様が僕にくれた言葉を軸に、今までの大蛇丸様の些細な行動すべてが、脳裏で有機的に結びついていく。それは一本の道となり僕の前に開けた。

全身がぶるぶると震えた。大蛇丸様の、途方もなく深遠なお考え。

押し寄せる、尊敬と衝撃、驚愕、興奮、それらの混ざったかつてない感情の波。

つまり、こういうことだ。

マンダを取り込むことで大蛇丸様は蛇を超え——  
僕は音をたてて生唾を飲み込んだ。

——龍へと、昇華する。

「……そういうことなんです。大蛇丸様」

大蛇丸様は片手を顔の半分に翳し、ククククと機嫌よさように嗤った。僕は眼鏡を押し上げる。

なら一切手は抜けない。これは大蛇丸様がさらなる高み、六道仙人と同じ次元へ到達するための儀式。

いわば、白日昇天の儀。

「承知いたしました。では、手配はこちらで」

言うが早いか、小型の巻物を二つ忍具入れから取り出す。デイダラとの戦闘で僕の服へ付着していた大蛇丸様の血液を、二つあるうち一方の巻物に描かれる口寄せ術式になすり、連絡用の蛇を口寄せした。アジトから調理器具一式を持ってこさせなければならぬ。蛇をメインに満漢全席を作り饗するため必要と考えられる用意の数々を思い浮かべ、口寄せに用いたのとは別の巻物へ書き連ねる。

「流石ねあなた。やはり優秀……」

「滅相ありません大蛇丸様」

おい、と臨戦態勢さながらに研ぎ澄まされた雰囲気のススケくんが鋭く声を発した。せつかちねエ。愉しげな大蛇丸様の応答を耳に挟みながら、僕は巻物を書き上げた。

大蛇丸様の視線が、僕の書き終えた巻物を飲み込んでアジトの方角へ一直線に這っていく口寄せ蛇を追う。蛇はあつという間に遠のき見えなくなった。

「では始めようじゃない………お料理を」

まずはぶつ切りにするわ。アアア——！ 吐瀉するかと見間違う仕草で大蛇丸様が大きく口を開く。口から鎌首をもたげて飛び出てきた蛇の、さらにその口から草薙の剣が吐き出された。空を仰ぐ大蛇

丸様。剣と首はすると天を衝くように伸びて、マンダの胴体の直径を超えるほどの長さになる。

見上げていると、大蛇丸様の頭頂部が突如ブレた。きつとサスケくんは写輪眼で一挙一動をはつきりと視認できたのだらうけど、僕にはブレたようにしか見えなかった。一瞬の後、とぐろを巻くマンダの死骸に縦一直線の裂傷が刻み込まれる。烈風と風切り音がゼロコンマ数秒遅れて一帯を駆け抜ける。

額を汗が伝った。言い表し難い絶技。もし大蛇丸様に刃を向けられたら、何が起きたか認識する間もなく、僕は死ぬ。その実感に寒気がする。

亀の甲羅すら容易く切断する草薙の剣は、マンダの骨格もまた物ともしなかった。風切り音は秒間七回。長く伸びた首ごと縦横無尽に振るわれる剣によつて、マンダは無数の肉塊へと解体された。

「こんなところね」

剣を元の長さに戻して飲み込み、首の長さも元に戻した大蛇丸様が、顎に手を当てて呟いた。

実験の名の下、人間も、人間じゃない生物も、数々の肉体を大蛇丸様とともに弄んだ僕には分かる。目の前にさらされている、解体されたマンダの尻いだ湖のように滑らかな切断面、そこに活きている。泣き叫ぶ実験体をバラした経験の数々が。

意味があるのかなのかと、内心辟易しながら助手を務めさせていた。ただいた凄惨極まる実験にも、やはり意味はあったんですね。疑義を抱いた、かつての僕の不肖をお許しください大蛇丸様。

「カブト、あなたは血抜きと毒抜きよ。サスケくんは、フフ……あらあら、ウズついちゃってるわねエ」

太刀筋の残像を目で追う気配を醸し、隣でむつつりと黙っていたサスケくんを、僕は横目で窺った。そして、その自分の浅慮を呪った。サスケくんの双眸に爛々とまたたく、瞳孔の開ききった写輪眼。わなわなと小刻みに震える全身。眼前に据え置かれた兄を殺す寸前、もしくは射精をする寸前みたいに、サスケくんはギンギンだった。

「じゃあそうね、包丁さばき……じゃないわね、剣術、見せてもらおう



かしら、サスケくん」

大蛇丸様に下賜された特別性の草薙の剣を一瞬で鞘から抜き放ち、太刀筋を閃かせたサスケくん。大蛇丸様は鷹揚に腕を組み、注意を加えた。

「切りづらいからといって、千鳥刀にしちゃあダメよ？ 肉の繊維が傷んじゃうからねエ」

チャクラを帯びることが可能なその一振に、サスケくんの十八番忍術、雷遁・千鳥を流し、切れ味を格段に向上させる。それが千鳥刀だった。確かに、帯びた雷遁チャクラの余波で繊維は傷むだろう。小うるせエな、と言いたげにサスケくんは大蛇丸様を睨み、「……分かっている」と返して地を蹴った。

まるで剣舞でもしているかのような、芸術的な太刀捌きだった。的確に写輪眼で筋の部分を見切り、繊維に沿って捌いていく。僕も負けていられない。忍具入れから再び口寄せの巻物を取り出し、今度は僕の血を使って医療用の精製水を口寄せした。チャクラを流し、ぷるぷるとした球状の輪郭を水に持たせて、手のひらにそれを吸着させる。サスケくんが見事に皮を剥がし、数十センチ四方のブロックにしていくそばから、水球による解毒治療の応用で僕は血と毒を肉より抜いていった。

しばらく同じ作業を続けていると、忍がこの調理場に姿を現した。僕が蛇を使って呼んだ、音の忍達だった。

「急で悪かったね。ご苦労さま」

瞬身の術を駆使したんだろう、見るからにチャクラが切れかけている様子で頼んだ物資を届けに来た音の忍達は、「キミらも同席するかい？」と僕が薄笑いを浮かべながら言おうとしていることを予期したのか、かの四代目火影、木ノ葉の黄色い閃光を彷彿させる身のこなしで、物資を置くやいなやアジトの方角へと掻き消えていった。

「では、下処理も済んだことだし、次の工程に移るわよ」

大蛇丸様の指示に従い、僕は血と毒の抜けた肉をチャクラメスで細かく切り刻んでいく。

料理は人体実験より楽でいい。なんせ取り扱うのが死んだあとの

生物だから暴れるってことがない。麻酔を適量投与し、チャクラが練れないよう死なない程度に経絡系へ処置を施すと、そういう面倒な手間も要求されない。何より、凄惨さが無い。

一番近いところで大蛇丸様に付き従っているから勘違いされがちだけど、僕は何も凄惨なことが好きなわけじゃない。よく誤解されるけど、別にサドなわけでも、ネクロフィリアなわけでもない。じゃあなんで凄惨なことばかりしているかというと、それは僕にも分からない。そういう星の下に生まれたとしか言いようがない。たまたま僕というピースの嵌ったパズルが地獄絵図だっただけ。忍にはありがちなそれさ。

ストレスの種は人体実験だけじゃない。

機嫌が悪いと大蛇丸様はストレス解消で人を殺す。片づけをするのは僕なのに。いくら僕でも惨殺死体の処理は気が滅入る。その点これは料理の具材だし人間ではなく蛇だ。死んでるものの取り扱いでこんなに穏やかな気分になるのはいつ以来だろう。ぼんやり浮かぶのは、木ノ葉の孤児院にいたかつて。誰かと一緒に調理をするなんて、本当にあの頃以来だ。

「やりなさいサスケくん。中火よ」

「アンタは黙って自分の仕事をしたらどうだ」

草薙の剣でマンダを幾つもの肉塊に解体して以降、腕を組んで指示を出すことしかしていない大蛇丸様に、サスケくんは苛立っているようだった。

「ククク……。見せて頂戴。修行の成果を」

これ見よがしに舌打ちをしてから、サスケくんは目にも留まらぬ速さで印を結び、大きく肺に息を吸い込む。

「火遁・豪火球の術！」

炸裂したのは、うちは一族の十八番。サスケくんの口元から放たれた巨大な火の玉は、僕が刻んだ肉を飲み込んだ。

大蛇丸様は何の躊躇いもなく、サスケくんが吐き出し続ける火炎の中へ右腕を突っ込んだ。

「適温、完璧よ。大したものだわ。流石はうちはといったところかし

ら」

そう褒めてから、大蛇丸様は右腕を引き抜いた。ぷすぷすと腕から立ち昇る煙を一瞥し、焼けただれた皮膚を左手で引き剥がす。剥がされた下には、産まれたてで羊水が身体に付着したままの赤子のような、てらてらした皮膚が既に出来上がっていた。

「火を扱わせて右に出る忍一族はいないわね」

大蛇丸様は基本的に褒めて伸ばす教育方針だ。その姿勢は相手を問わず一貫している。それは、期待に応えられなければ殺される点も含めて。つまり大蛇丸様は、自分以外の命の価値を、その有する能力によってのみ差別する、とても明瞭で公平な能力主義を掲げられているお方なんだ。真似しようにも真似できるもんじゃない。

大蛇丸様よりお褒めの言葉を賜ったサスケくんは、「フン」と鼻を鳴らした。まったく、この子は。

思うに、サスケくんはシャイでプライドが高いガキだ。逆鱗と好物を押さえれば、扱うのはそんなに難しくもない。時々欲望が高じて加減を誤るけど、大蛇丸様は概ねサスケくんのツボを押さええているように思う。俯瞰できる立ち位置の僕からすれば、サスケくんにも最も足りないのは思慮深さだ。案外、元班員の人柱力、ナルトくんとは似た者同士かもしれない。

戦国最強の一角にして木ノ葉のエリート・うちは一族の末裔サスケくんと伝説の三忍である大蛇丸様、そしてその腹心の僕。このレベルの抜け忍が集まれば、実現不可能な事柄を探すほうが難しくなる。料理はあつという間に完成した。

最後の仕上げに、僕は医療用のメスと千本を巧みに使って、肉の一片に薔薇の花のような飾り切りを施した。初めてやったけど、わりと見栄え良く出来た。繊細な作業は得意だし、嫌いじゃない。

「いい！ いいわカブト!! すごく私好み……！ あなたデイダラよりよほど優れた芸術家だわ……！」

「お褒めにあずかり光荣です大蛇丸様」

今は亡き君麻呂と僕を伴い、木ノ葉崩しの前夜祭とばかりに四代目風影を不意打ちで殺害したときよりも、大蛇丸様は楽しそうだった。

綺麗に盛り付けがされた豪華な卓を僕らは囲んだ。食欲をそそる匂いが鼻孔を撥る。

「サスケくん、あなたが音頭を取りなさい」

「……断る。アンタが自分でやれ」

「つれないね。デイダラ討伐の一番の功労者じゃないか。それに、マンド様を殺したのはキミも同然だろう？ お命いただきますも言えないのかい？」

皮肉って促せば、サスケくんは眼力だけで射殺せそうな目つきで僕を睨みつけ、渋々、本当に渋々な様子で、両手を合わせた。

「……いただきます」

「いただきます」

「ククク……いただきます」

僕とサスケくんが揃って箸を持つとした瞬間だった。

「待ちなさい!!」

心臓が止まった。死んだ。

瞬間的に放たれた尾獣もかくやの膨大なチャクラと殺気により、大蛇丸様を中心とした風が一带を吹き渡った。

死神を見るような視線を、サスケくんは大蛇丸様に向けていた。

僕は生きていた。信じがたくも、心臓は未だ拍動していた。

僕に自分の死を克明に幻視させた大蛇丸様は、血酒の注がれるグラスを掲げた。

「順番を間違えてしまったわ。先に、乾杯をしましょう」

冷や汗が鼻筋まで伝ってきて、ずり下がってしまったメガネを、僕は押し上げた。

「……………そ、そうですね」

「……………あ、ああ」

今度は素直に音頭を取ったサスケくんの「乾杯」で、ようやく宴は始まった。

血酒を真っ先に飲み干した大蛇丸様が、料理にも真っ先に手を付けた。箸で口の中に放り込み、咀嚼する。蛇のような瞳孔がカツ！と開く。

こ、これはツ!?　ぐああああああ!!　雲隠れの雷遁忍術、感激波を全身に喰らったかの如く、旨味成分が脳幹部にもたらす電撃的な感激の波が全身の神経を駆け巡りツ——!!　記憶が、明滅して……!?!?　ぐう!　これは、これはア……!　幻幽丸!?!?　サスケエ!?　イタチイ!?!　キミマロオ!?　みたらしアンコオ!?　綱手エ!?　自来也ア!?　さ、猿飛センセエエエ!!!　……ツはあ!　あ、危ない、記憶が逆行するなんて……ウマすぎ!、生まれ直してしまうところだったわ。僕はメガネを指先で押し上げた。自慢じゃないけど、僕ぐらいになると、恍惚とした大蛇丸様の心中を的確にお察しすることが出来る。箸をつけて、出来たての料理を口に運んだ。

確かに、これは美味しい。幼い頃の記憶へと還りそうになる気持ちもわかる。

「味はどう?」

——カブト、味はどう?　口に合えばいいけど……実は私、お料理そんな得意じゃないから。

きつと、そのせいだ。口の端を邪悪に吊り上げ、こちらの様子を窺う大蛇丸様が、なぜか孤児院のマザーと被った。記憶の中、不安げに微笑むマザーと。

「とても美味しいです、大蛇丸様」

「そう。それはよかつたわ」

今より、私が君の上司となり兄弟となり親となる。私がダンゾウから君を守る。

十年前、絶望の淵に佇む僕に、そう声をかけてくださった大蛇丸様。もし彼女が生きていたら、今の僕らを見てなんて言うだろう。大蛇丸様に貴女の影を見た僕に。未だに、貴女のメガネを捨てられない僕に。もし彼女が、僕がカブトだと……あのととき、もし……はつと弾かれたように空を見上げた。どうしてか、月がサスケくんの写輪眼のように赤く染まり、僕を見下ろしている気がしたから。

あるのは、澄み渡る青さと、眩しい太陽だけだった。